

# 『長崎大学言語教育研究センター論集』 第12号

---

目 次

巻 頭 言 ..... 長崎大学言語教育研究センター長 西原 俊明

論 文

反応目的語構文にみられる有標性についての一考察  
..... 西原 俊明・西原 梨沙

---

2024年3月  
長崎大学 言語教育研究センター  
Nagasaki University

# 目 次

巻 頭 言 ..... 長崎大学言語教育研究センター長 西原 俊明

## 論 文

反応目的語構文にみられる有標性についての一考察  
..... 西原 俊明・西原 梨沙 ..... 1

## 巻 頭 言

コロナパンデミックからようやく解放されたかに見えましたが、私たちは新たな脅威と向き合わなければならぬ年となりました。新たな脅威とは、言うまでもなく生成 AI の登場です。CHAT GPT をはじめとする生成 AI の登場により、外国語の壁が低くなったと思います。しかしながら、他方では、今後の外国語教育がどのような方向に向かうのか見定める過渡期にあります。AI を用いないのであれば、AI を利用している教育機関に遅れをとってしまいますし、使い方を間違えると大学での言語教育の意味が損なわれてしまいます。そこで、2023 年度は関西大学の水本篤先生をお招きし、大学 FD として「生成 AI とこれからの外国語教育」についてお話をさせていただきました。言語教育研究センターでは、FD 後に CHAT GPT を各先生に使用していただき、言語教育で用いる場合の正しい方法について調査、検証をしていただいています。

コロナが落ち着きを見せた 2023 年度は、オーストラリア語学研修、フランス語学研修、中国語研修を言語教育研究センター教員を中心に実施します。オーストラリア語学研修はインターンシップを組み込んだ初めての教養教育プログラムになります。フランス語では、長崎外国語大学のフランス人留学生たちと合同オンライン授業を実施し、また、また、フランス語学研修では、フランス政府公式機関の九州日仏学館から講師の先生を招いて研修以前に集中講座を長崎で行い、その後フランスに渡るという初めての形式を取り、その効果を検証します。3 月には、言語学者でもあり、認知科学者でもある関西大学客員教授、慶應大学名誉教授の天津由紀雄先生をお招きし、今後の言語教育のあり方を含めた研修が実施されます。このように、言語教育研究センターは、様々な教育プログラムを計画、実施しております。

研究面では、言語教育研究センターの先生方が代表者、あるいは共同研究者として科学研究費による研究を精力的に行っています。2023 年度は、その研究成果を言語教育研究センター紀要以外で発表する機会に恵まれました。そのこともあってか昨年に続き 1 篇の論考となりました。この論考は、コーパスデータをもとに反応目的語構文の特徴についてコーパスデータに基づき検証したものになります。外部の方への刺激や参考になれば幸いです。来年度は、査読つきということは堅持しながらも必要であれば規定を見直し、少しでも多くの方に投稿していただくように考えたいと思います。

2024 年 3 月

言語教育研究センター長 西原俊明

# 論 文

## 反応目的語構文にみられる有標性についての一考察\*

西原 俊明\*<sup>1</sup>・西原 梨沙\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup>長崎大学 言語教育研究センター

\*<sup>2</sup>Basic, Co., Ltd

### Analyzing Marked Characteristics in Reaction Object Constructions: A Corpus-Based Study of English

Toshiaki NISHIHARA \*<sup>1</sup>, Risa NISHIHARA \*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup>Center for Language Studies, Nagasaki University

\*<sup>2</sup>Basic Co., Ltd

#### Abstract

This paper empirically examines the syntactic and semantic properties of the Reaction Object Construction (ROC) in English. In order to explore the properties of ROC, we utilize two extensive corpora: the Corpus of Contemporary American English and the British National Corpus. Our study begins with a close scrutiny of documented examples in both corpora, allowing us to compare and discuss the research findings of previous research (Omuro (2016)) and our present study. Furthermore, we delve into an exploration of why the ROC constitutes a marked construction, with particular focus on the intransitive use of the verbs found within the ROC.

#### 1. はじめに

英語には、(1)に示す反応目的語構文 (Reaction Object Construction)(以下、ROC)、あるいは動作表現構文(Gesture-Expression Construction)と呼ばれる構文が存在する。Levin(1993)によれば、ROC に生じる典型的な動詞は、beam に代表される非言語的表現動詞類、nod などの wink 動詞類、murmur などの発話様態動詞類である。(1)の例は、これら典型的な動詞の類からの用例である。

- (1) a. Sandra beamed a cheerful welcome. (Levin (1993: 98))  
b. Katie nodded her agreement. (COCA)  
c. She murmured her thanks. (COCA)

この構文は、(1)から明らかなように、本来自動詞と考えられる動詞の後に、ある種の反応を表す名詞句が後続する。Jespersen (1928)、Levin (1993)等の分析によると、ROCの意味的特徴は(2)に示すものである。例文(3a)は、(2)に従い、(3b)のように書き換えることができる。

- (2) “express (a reaction) by V-ing,” where “V” is the basic sense of the verb. (Levin (1993: 98))
- (3) a. She mumbled her adoration.  
b. She expressed / signaled her adoration by mumbling. (Levin (1993: 98))

ROCは、大室(2016)では有標構文として分析されている。<sup>1</sup>本稿の目的は、大規模コーパスである Corpus of Contemporary American English (以下、COCA)、及び British National Corpus (以下、BNC)を用いてROCの有標性を検証することにある。<sup>2</sup>また、有標性に関して、先に述べたROCに生起する典型的な動詞類からいくつかの動詞に焦点を当て、相違点が存在するのかどうか、存在するとしたらそれはどのようなことに起因するのかについても検証する。さらに、動詞が表す動作によって伝える反応がどのような種類かについても併せてコーパス検証を行う。

## 2. 大規模コーパスにおけるROCの特徴について

Levin (1993)では、ROCに生起する反応を表す名詞句の例として、approval、disapproval、assent、admiration、digest、yes、noが挙げられている。しかしながら、どの動詞類とどのタイプの反応が結びつきやすいのかについては詳しく議論されてい

---

\*本稿をまとめるにあたって、査読者から貴重なコメント、ご指摘をいただいた。ここに謝辞を記したい。

1 ROCに生じる動詞は、1節で述べた非言語的表現動詞類、wink動詞類、発話様態動詞類である。これらの動詞に加えて、西原・古川(2021)では、(2)の意味を持つことが可能な音創出動詞 tut-tut、woof、voice、hum、eco、barkなどもROCに生じることができることを指摘している。また、ROCの特徴を捉える統語的派生について詳細に論じている。

(i) Seed tut-tuts his thanks.

(ii) Atlas woofed his agreement.

(iii) They barked our good mornings. (COCA)

ROCは、ある種の動作をもとに表情や音などを通して態度や意見、気持ちなどを伝える構文だと言える。

2 大室(2016)では、独自に現代英米小説55冊からのデータをもとにROCの有標性を論じている。

ない。ここでは、非言語的表現動詞類、wink 動詞類、発話様態動詞類のうち先行研究において取り上げられている動詞の中からそれぞれ二つの動詞を取り上げてコーパス調査、分析を行う。

## 2.1 非言語的表現動詞類

ここでは、ROC との関連で非言語的表現動詞類である beam と frown を取り上げて考察する。動詞 beam は、Collins English Dictionary (online)、Cambridge Dictionary (online)によると、それぞれ次の説明が与えられている。

(4) If you say that someone is beaming, you mean that they have a big smile on their face because they are happy, pleased, or proud about something.

(Collins English Dictionary (online))

to smile with obvious pleasure

(Cambridge Dictionary (online))

上記二つの辞書の定義に基づくと、動詞 beam は、満足感やプライドと共に笑顔を示す行為を表すと言える。ここで、前節で確認した ROC の意味(2)に照らし合わせて考えると、動詞が動作とともに伝える反応を表す名詞表現は笑顔に関連したものになると予測できる。実際に、COCA、BNC を用いて生起している名詞句の出現数を示したものが表 1 である。

		COCA			BNC		
		φ	his	her	φ	his	her
beam	adoration	0	0	1	0	0	0
	approval	1	1	2	1	0	1
	blessing	0	0	1	0	0	0
	pleasure	0	1	1	0	0	0
	delight	0	0	1	0	0	0
	gratitude	0	1	0	0	0	0

表 1 から考えられることは、喜びの感情、感謝の気持ち、是認、賞賛などが笑顔とともに伝えられることがわかる。表 1 は同時に動詞 beam を用いた ROC の出現例がかなり少ないことを示している。

動詞 beam は、Levin (1993)によると、(5)に示す動詞-冠詞-形容詞-名詞句の連鎖も可能である。

(5) Sandra beamed a cheerful welcome. (Levin (1993: 98))

英語では(5)に示す連鎖が可能であることから、[beam] a [j\*] [n\*]のタグを用いて COCA、及び BNC 検索を行うことにする。

表 2	COCA	BNC
[beam] a-adjective-smile	12	3
[beam] a-adjective-grin	1	0
[beam] a-adjective-welcome	1	0

COCA においては、名詞句として smile を伴う例が 12 例、grin を伴う例が 1 例、welcome を伴う例が 1 例見つかる。他方、BNC では smile を伴う例が 3 例のみである。動詞-冠詞-形容詞-名詞句の連鎖連鎖においても、COCA、BNC での出現例が少ないことがわかる。

ここまで動詞 beam を用いた BNC、COCA にみられる ROC の例について見てきたが、ROC の出現例は後述する nod と比較して極端に少ない。この事実は、大室 (2016)が指摘しているように、動詞 beam を用いた ROC の有標性を示すものと考えることができる。ROC の出現例が少ない要因については、3 節で詳しく考察することにする。

次に、動詞 frown を含む ROC について考察する。動詞 frown は、Cambridge English Dictionary の定義 (6)が表すように、マイナスの感情と結びつきやすい。

(6) to bring your eyebrows together so that there are lines on your face above your eyes, often while turning the corners of your mouth downwards, showing that you are annoyed, worried, sad, or thinking hard.

(Cambridge English Dictionary online))

表 2

		COCA			BNC		
		$\phi$	his	her	$\phi$	his	her
frown	disapproval	2	2	0	1	0	0
	disagreement	0	0	1	0	0	0
	answer	0	1	0	0	0	0
	smile	1	1	0	0	0	0
	confusion	0	0	1	0	0	1
	concern	0	0	1	0	0	0
	annoyance	0	0	1	0	0	0

動詞 *beam* の場合と同様に、表 (2) が示すように、*disapproval* をはじめとするマイナスの感情を表す表現が数例見つかるが、BNC、COCA での *frown* を含む ROC の出現例は極めて少ない。また、*frown*-冠詞-形容詞-名詞句の連鎖を含む ROC は、COCA では 2 例、BNC では ROC の例は確認できない。

表 3

	COCA	BNC
[frown] a-adjective-expression	1	0
[frown] a-adjective-loss	1	0

動詞 *beam*、*frown* を含む ROC の出現率は極めて低いと結論づけることができる。

## 2.2 Wink 動詞類

2.2 節では、*wink* 動詞類のうち、動詞 *nod* と動詞 *shrug* についてコーパス検証、並びに考察を行うことにする。まず、辞書での *nod* の意味を確認しておく。

(7) to move your head down and then up, sometimes several times, especially to show agreement, approval, or greeting, or to show something by doing this:

(Cambridge English Dictionary online))

(7)の定義によると、動詞 *nod* は、是認、理解、同意などを伝えることが可能である。大室 (2016) は *nod* がとる目的後に課せられる選択制限は、MESSAGE と AGREEMENT であると分析している。ここで言う MESSAGE とは、主動詞の動作で示される伝達内容を表す。大室 (2016) は、同意を示す名詞だけで全体の出現の 72% を占めると分析している。この事実と COCA、BNC を用いての検索結果を比較し

てみることにする。

表 4

		COCA			BNC		
		$\phi$	his	her	$\phi$	his	her
nod	agreement	93	52	21	0	10	9
	approval	45	61	25	0	7	1
	assent	27	16	8	0	6	0
	consent	1	3	5	0	1	0
	thanks	25	46	20	0	9	5
	appreciation	1	5	3	0	2	0
	acceptance	4	3	5	0	3	0
	understanding	5	28	12	0	4	0
	satisfaction	1	2	3	0	2	1
	sympathy	0	0	0	0	1	0
	acknowledgment	6	3	11	0	7	7

表 4 から明らかなように、動詞 **nod** に続く名詞句は同意を示す名詞の出現が圧倒的に多いことがわかる。この意味において、大室 (2016) が指摘した事実を別の大規模コーパス調査で裏付けるものとなっている。また、同意を示す名詞に続いて、「感謝」「理解」を示す名詞句が多いことがわかる。動詞 **nod** は様々な内容を伝達内容として伝えることが可能であるが、同意>感謝>理解という意味的選択制限が軸になると言える。

表 4 の出現例だけを見ると、アメリカ英語とイギリス英語とでは違いがあるように思える。しかしながら、COCA と BNC ではコーパスの規模が異なるので PER MIL で比較することにする。用例が一番多い **nod-(his /her) agreement** の連鎖を例に取り上げると、(8)に示す結果が得られる。(8)からは、イギリス英語の場合の方が ROC の使用頻度がやや高いと言える。また、二つのコーパスからは、所有格名詞を入れない連鎖の場合の使用頻度がやや高いと言える。

#### (8) COCA

[nod] [agreement] (0.09)、[nod] [his] [agreement] (0.05)、  
[nod] her agreement (0.02)

#### BNC

[nod] [agreement] (0.30)、[nod] [his] [agreement] (0.10)、  
[nod] [her] [agreement] (0.09)

nod-冠詞-形容詞-名詞句の連鎖の場合についてみる。この連鎖の場合も動詞 beam や frown よりも出現例がやや多い。

表 5

	COCA	BNC
[nod] a-adjective-greeting	3	2
[nod] a-adjective-approval	1	0
[nod] a-adjective-acknowledgement	3	0
[nod] a-adjective-smile	1	0
[nod] a-adjective-grin	1	0
[nod] a-adjective-command	1	0
[nod] a-adjective-reassurance	1	0
[nod] a-adjective-farewell	2	0
[nod] a-adjective-hello	3	0
[nod] a-adjective-agreement	1	0
[nod] a-adjective-confirmation	1	0
[nod] a-adjective-reply	1	0
[nod] a-adjective-morning	1	0
[nod] a-adjective-assent	0	2

次に、動詞 shrug を含む ROC について考察する。この場合、[shrug] shoulders の連鎖を含む場合は考察の対象としないことにする。[shrug] shoulders の連鎖は、知らないこと、あるいは興味関心がないことを伝える表現形式であるが、伝達したい対象を目的語位置に持たないという点で ROC の他の例と異なるからである。COCA、BNC に含まれる ROC の用例は、表 6 の通りである。

表 6

		COCA			BNC		
		$\phi$	his	her	$\phi$	his	her
[shrug]	uncertainty	0	1	0	0	0	0
	indifference	2	1	0	0	0	0
	thoughts	0	1	0	0	0	0
	disinterest	0	1	0	0	0	0
	apologies	0	0	0	0	1	0
	inadequacy	0	0	0	0	1	0
	incomprehension	0	0	0	1	0	0
	acceptance	0	0	0	1	0	0

表6から明らかなように、動詞 *shrug* を含む ROC の用例は極端に少ない。用例が少ないという事実はあるが、ROC の場合、知らないこと、あるいは興味関心がないことを伝えることに加えて、謝罪なども伝える対象になることがわかる。

これまで見てきたように、ROC では形容詞を含む連鎖も可能なことから、動詞 *shrug* に形容詞を含む連鎖が続く場合を見てみると、表現7の結果が得られる。この連鎖の ROC の出現数は極端に少ない。反応目的語としては、別れ、謝罪の気持ち、賛同を表すことが可能である。

	COCA	BNC
[shrug] a-adjective-farewell	1	0
[shrug] a-adjective-apology	1	0
[shrug] a-adjective-agreement	1	0

これまでの大規模コーパス検索に基づく議論から、*wink* 動詞類である *nod* と *shrug* を含む ROC については出現率がかなり異なることが明らかになったと思われる。動詞 *nod* の場合の出現率が高い事実については3節で議論することにする。

### 2.3 発話様態動詞類

この節では、発話様態動詞 *murmur* と *roar* を含む ROC について考察する。動詞 *murmur* を含む連鎖の場合、COCA と BNC を用いた検索では、表8に示す結果が得られる。発話様態動詞のなかで *murmur* を選んだのは、先行研究などでよく取り上げられているという理由による。また、*roar* を取り上げるのは、音量に関して *murmur* とは逆の極に存在すると考えたことによる。

		COCA			BNC		
		$\phi$	his	her	$\phi$	his	her
<i>murmur</i>	thanks	5	7	5	0	1	5
	agreement	13	2	0	5	2	1
	admiration	1	0	0	0	1	0
	pleasure	0	0	0	0	1	0
	appreciation	1	1	0	0	1	0
	concern	0	0	0	0	1	0
	welcome	0	0	0	0	0	1
	approval	4	0	1	1	0	0
	apologies	2	0	2	3	0	0

表 8 から明らかなように、発話様態動詞 *murmur* を含む ROC の反応目的語は、感謝、同意、歓迎の意、謝罪を表す表現であるが、出現率は低いことが確認できる。また、*murmur* が表す音のレベルにより伝えやすいものが賛同の意であることも見て取れる。他方、表 9 は、形容詞を含む連鎖の結果である。興味深い点は、形容詞を含む連鎖の場合、連鎖に含まれる名詞句が表 8 に示す名詞句と異なるという点である。しかしながら、出現率とはいうと、*murmur* を含む ROC の出現率は低い。

	COCA	BNC
[murmur] a-adjective- greeting	2	0
[murmur] a-adjective- good-bye	2	0
[murmur] a-adjective- good night	1	0
[murmur] a-adjective- assent	1	0
[murmur] a-adjective- thanks	1	0
[murmur] a-adjective- apology	1	0
[murmur] a-adjective- protest	1	0

次に、*murmur* とは音の大きさにおいて逆の極にある動詞 *roar* について考察をする。表 10 から明らかなように、アメリカ英語においては、*murmur* に近い用例数が確認できる。しかしながら、表 11 が示すように、形容詞を含む *roar*-a-形容詞-名詞の連鎖の用例は少ない。動詞 *roar* がとる反応目的語は容認、不快感、怒りなどが占める。

	COCA			BNC		
	$\phi$	his	her	$\phi$	his	her
[roar]						
approval	20	2	0	1	0	1
applause	9	0	0	0	0	0
displeasure	1	2	0	0	0	0
disagreement	0	1	0	0	0	0
outrage	1	1	0	0	0	0
fury	0	1	0	0	0	0
frustration	0	1	0	0	0	0
dissatisfaction	0	1	0	0	0	0
anger	0	1	0	0	0	0

	COCA	BNC
[roar]-a-adjective-welcome	1	0
[roar]-a-adjective-reaction	1	0

2節では、ROCに生じる3つの動詞類からそれぞれ二つの動詞を取り上げ、COCAとBNCを用いて出現率を検証した。大室(2016)が指摘したようにROCは有標の構文であることが確認できた。また、有標の構文の中であって、動詞 *nod* だけは他の動詞よりも出現率が高いことも確認できた。これは、頷くという行為が色々な反応と結びつくためだと考えられる。それでは、他の動詞類の場合、なぜROCは有標な構文なのだろうか。次節では、その理由について考察、分析を試みることにする。

### 3. ROCの有標性の背後ある可能な要因

文形式から考えると、ROCは本来自動詞である動詞に名詞句が後続するという特殊な形式を取る。このことから、歴史的には、自動詞用法よりも後に生じた文形式である可能性がある。そこで、Corpus of Historical American English (以下、COHA)とGoogle N-gram Viewerを用いて、2節で取り上げた動詞について1例ずつ取り上げ、出現の時期を見ていくことにする。

#### 3.1 COHAとGoogle N-gram Viewerによる分析

まず、動詞 *beam* について考察する。ここでは、ROCと自動詞用として *beam* を含む *beam with*-名詞句の連鎖について見ることにする。COHAを用いて[*beam*] *his/her*[*n\**]のタグで検索すると、*beamed his pleasure*の連鎖は1940年、*beamed her approval*は1950年、*beamed a genuine welcome*の連鎖は1952年に出現している。他方、*beamed with pleasure*の連鎖では1830年、*beamed with joy*の連鎖では1820年に例が見られる。COHA検索の結果からすると、ROCはかなり遅れて使用され始めたことになる。

次に、ROCに生起する *wink* 動詞類である *nod* について見てみる。ROCの用例は、以下の挙げる通りである。[*nod*][*assent*] (1820)、[*nod*] [*his*] [*assent*] (1840)、[*nod*] [*her*] [*assent*] (1890)、[*nod*] [*thanks*] (1910)、[*nod*] [*his*] [*thanks*] (1830)、[*nod*] [*her*] [*thanks*] (1970)、[*nod*] [*her*] [*approval*] (1880)、[*nod*] [*his*] [*agreement*] (1950)、[*nod*] [*his*] [*approval*] (1890)である。動詞 *beam* を含むROCが1900年代に使用され始めたのに対して、動詞 *nod* を含むROCは1800年代の初めの方から用い始められていたことがわかる。他方、*in*-句を伴う自動詞 *nod* を含む事例をCOHAで見ると、[*nod*] [*in*] [*approval*] (1840)、[*nod*] [*in*] [*assent*] (1840)、[*nod*] [*in*] [*thanks*] (1960)のようになる。動詞 *nod* と *in*-句を含む連鎖が用いられた時期に *nod* を含むROCが用いられていることが確認できる。<sup>3</sup>

3 動詞 *nod* の場合、ROCの基本の意味である(2)に合致するのは、*in*-句の方になる。*with* を伴う(i)の例は、(ii)のような意味で用いることができ、(2)には合致しない。

(i) He nodded with agreement.

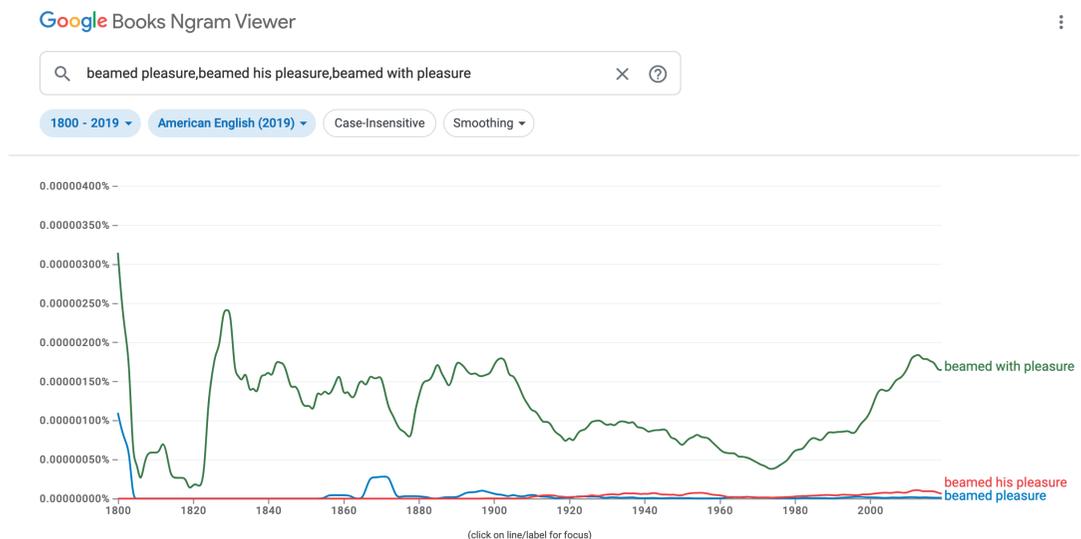
(ii) He agreed with his partner's plan and signaled to his partner to move forward by nodding. His partner is a few steps away from him.

最後に、COHA を用いて発話様態動詞 *murmur* の場合について見てみる。  
[murmur] approval (1880)、[murmur] thanks (1860)、[murmur] thanks, welcomes, and promises (1868)、[murmur] thanks and apologies (1868)のようになる。in-句を伴う場合は、[murmur] in agreement (1910)である。動詞 *murmur* の場合、*nod* と同じように 1800 年代から使用され始めている。

これまでの COHA 検索に基づく議論から、次のことを指摘することができる。一つは、自動詞用法が先に使用され、ROC が後から生じている場合と両方の用法がほぼ同時期に生じている場合が存在するという事実である。

歴史的な観点からの議論をさらに深めるために、Google N-gram Viewer による確認を行なっておく。Google N-gram Viewer を用いることによって、出現時期と出現率の両方を見ることができる。Google N-gram Viewer を用いて自動詞用法、具体的には with-句、または in-句を伴う連鎖と ROC を含む連鎖を比較することにする。<sup>4</sup>ここでは、COHA がアメリカ英語のデータであることから、Google N-gram Viewer のデータもアメリカ英語に限定する形でのデータを見ることとする。次に示す図 1～図 3 は、それぞれ先に見た *beam*、*nod*、*murmur* の場合の自動詞用法と ROC の出現率を比較したものである。図 1～図 3 は、ROC の出現率はいずれの動詞の場合もかなり低く、自動詞の場合の出現率が高いことを示している。

図 1



4 動詞 *beam* の場合、(i)に示すように、in-句も可能であるが、with-句の方が出現率が高い。ここでは出現率が高い用法で比較することにする。

(i) She beamed with / in approval.

図2

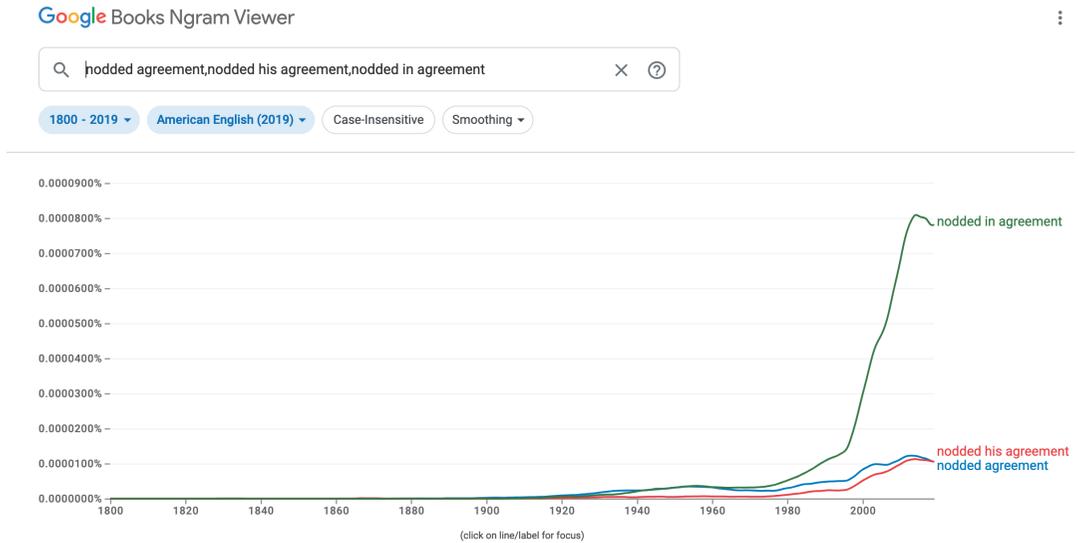
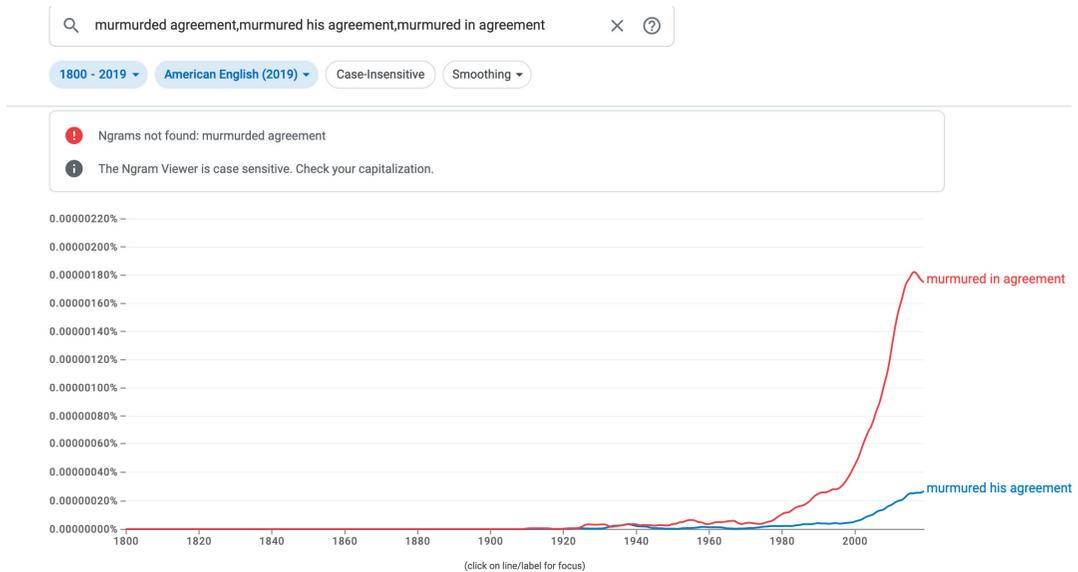


図3



これまでの議論から、自動詞用法を維持した形式と ROC の出現時期とは関係なく、前者の場合の出現率が高く、無標の形式であることが確認できたと思われる。<sup>5</sup> 3.2 節では、ROC が無標の形式に取って代われない要因を考えることにする。

5 大室 (2016)は、CHILDES (The Child Language Data Exchange System)を用いて四人の子供の発話資料を分析している。動詞 smile を含む自動詞の用例は 5 歳 4 ヶ月までの間に観察されるが、ROC を含む連鎖は観察されないことを指摘している。

### 3.2 多様な表現選択の可能性

3.1 節において、with-句と in-句を伴う自動詞の用例について触れた。ここではこれらの句内に生じる名詞の種類について考察する。先ず、非言語的表現動詞類である beam とそれに続く with-句から考察する。表 12 は、beam with に後続する名詞は、反応目的語以外の名詞である pride、joy、happiness、wonder が含まれることがわかる。

		COCA	BNC
[beam] with	pride	140	5
	joy	20	4
	pleasure	19	15
	excitement	8	0
	delight	11	3
	admiration	3	0
	satisfaction	5	2
	happiness	3	2
	recognition	1	0
	wonder	1	0
	hope	1	0

次に、wink 動詞類である動詞 nod と in-句の場合を見てみる。in-句に生じる名詞は、表 13 に示すように、ROC のそれとほぼ同じである。

		COCA	BNC
nod	in agreement	514	47
	in approval	81	5
	in assent	20	1
	in consent	2	0
	in thanks	6	0
	in appreciation	16	0
	in acceptance	7	0
	in understanding	58	0
	in satisfaction	29	2
	in sympathy	17	5
	in acknowledgment	19	2
	in recognition	20	1

最後に、発話様態動詞 *murmur* と前置詞 *in* に後続する名詞について見てみる。  
ROC では同意を示す名詞が反応目的語の位置を占めるが、前置詞を伴う形式の方が名詞の種類が多少多くなることがわかる。

	COCA	BNC
[murmur] in agreement	9	0
[murmur] in confusion	2	0
[murmur] in confusion	2	0
[murmur] in wonder	1	0
[murmur] in frustration	1	0
[murmur] in approval	1	0
[murmur] in greeting	1	0
[murmur] in disbelief	1	0
[murmur] in delight	1	0
[murmur] in astonishment	1	0
[murmur] in amusement	0	1
[murmur] in admiration	0	1

表 12~14 に基づくと、自動詞+前置詞句の方が、ROC よりも表現できる対象が多くなることが明らかになったと思われる。次に、自動詞+前置詞句の方が、表現できる対象が増えるだけでなく、可能な文法形式も多くなるという事実を明らかにしたい。動詞 *beam with* の連鎖は、次の例に見られるように、*at*-句とも共起できる。<sup>6</sup>

(9) She beamed with delight/pleasure at his remarks.

(Cambridge English Dictionary (online))

また、*with*-句と *at*-句の語順については、(10a) (10b)から明らかのように、入れ替えが可能である。

(10) a. She beamed at me with an amount of enthusiasm. (COCA)

b. Aaron shook his head, beaming with delight at Nathan's silliness. (COCA)

6 査読者から、動詞-ROC-with-句の連鎖を含む(i)の文が可能かどうかという指摘をいただいた。

(i) She beamed her welcome with pleasure.

動詞 *beam* を含む問題の連鎖は COCA では確認ができないが、動詞 *nod* では *nod-his agreement-with*-句を含む例が 1 例見つかるとのこと。出現率では、自動詞-with-句-前置詞句の組み合わせの方が高い。

(ii) Ebenezer finally nodded his approval with a small satisfied smile. (COCA)

at-句など別の表現形式との組み合わせは、非言語的表現動詞類である **beam** だけでなく、**wink** 動詞類である動詞 **nod** や発話様態動詞 **murmur** においても可能である。この事実を次の例が示している。

- (11) a. ...you can picture his boardroom table of underlings nodding in agreement at the idea of donning a uniform... (COCA)  
 b. He nodded at Cal. (COCA)  
 c. ...and nodded in recognition at references to Bush's love of off-color jokes... (COCA)  
 d. ...and the tuxedoed man nodded at him with approval. (COCA)

(9)~(11)に示した形式は、自動詞としての本来の形式を維持したものであり、表現形式の拡張が容易になると考えられる。この意味において、ROC に生起する動詞の自動詞用法を維持した文法形式の方がより多くの反応を表現できることから無標の構文になっていると考えられる。

上記のことに加えて、ROC に生起する動詞の自動詞用法の場合と ROC の場合のレジスターにおける相違点を見ることにする。ROC の出現率が一番高い **nod** を例に取り上げてレジスターを見ることにする。下記の二つの図は、それぞれ[nod] in agreement、[nod] \_ap agreement というタグを用いての検索結果である。\_ap は、可能な所有格形(his, her, my 等)を表す。

図 4

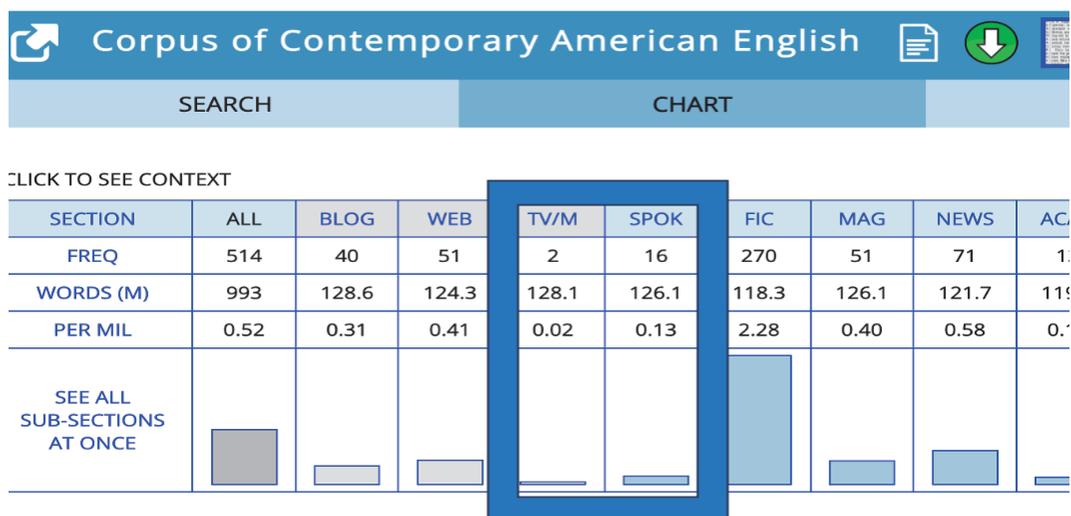


図5

CLICK TO SEE CONTEXT

SECTION	ALL	BLOG	WEB	TV/M	SPOK	FIC	MAG	NEWS	ACAD
FREQ	89	1	3	0	0	78	3	4	0
WORDS (M)	993	128.6	124.3	128.1	126.1	8.3	126.1	121.7	119.8
PER MIL	0.09	0.01	0.02	0.00	0.00	66	0.02	0.03	0.00
SEE ALL SUB-SECTIONS AT ONCE									

図4、5から確認できることは、ROCは話し言葉での出現がほぼなく、書き言葉、主に小説類(図のFIC)などで使用されていることがわかる。つまり、ROCが使用されている領域・場面が限定されていると言える。多様な表現選択という観点から考えると、自動詞用法の方が広く使用できるということになる。<sup>7</sup>

## 5. まとめ

この論考では、大室(2016)とは異なり、大規模コーパスであるCOCA、及びBNCを用いてROCの有標性を検証した。これら二つのコーパスにおけるROCの出現率は全体的にはそれほど高くなく、有標の構文であることが確認できた。この結果は、大室(2016)における主張を別のコーパスで確認したことになる。また、ROCが有標構文であっても3つの動詞類の中でwink動詞類に属するnodは、他の動詞類に比べて出現率が高いことが確認できた。これは、nodが伝達可能な反応に広がりがあることに起因すると思われる。さらに、この論考では、ROCに生起する動詞の自動詞用法の方が無標であり、ROCよりも表現対象や表現形式が多くなること、また、レジスターに限定がないことから英語母語話者に好まれる文形式であることを明らかにした。

<sup>7</sup> 英語母語話者の中には、話し言葉・書き言葉関係なくROCを認めない話者も存在することを指摘しておきたい。

### 参考文献

- 大室剛志(2016)「優先体系とコーパス」深谷輝彦・滝沢直宏編『コーパスと英文法・語法』ひつじ書房,169-194.
- Jespersen, Otto (1928) *Modern Grammar of English on Historical Principles, Part III*, Ejnar Munksgard, Copenhagen.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: a Preliminary Investigation*, Chicago University Press, Chicago.
- 西原俊明・古川武司 (2021)「反応目的語構文の統語的・意味的特徴について」*JELS* 38, 79-84.

### Corpus

British National Corpus  
Corpus of Contemporary American English  
Corpus of Historical American English  
Google N-gram Viewer

### 辞書

Collins English Dictionary (online)  
Cambridge Dictionary (online)

## 長崎大学言語教育研究センター論集投稿規定

1. 長崎大学言語教育研究センター論集を、毎年 3 月にオンライン刊行とする。刊行は原則として年 1 回とする。編集に関しては、外部査読員の審査結果をもとに編集委員会が担当する。
2. (内容) 本論集には、研究論文(査読付き)、研究ノート、授業実践報告および発行年度の言語教育研究センター活動報告を掲載する。ただし、編集委員会が特に必要と認めた場合は、この限りではない。
3. (投稿論文種別) 投稿可能なものは、研究論文(査読付き)、研究ノート、授業実践報告とし、翻訳、書評は含まず、未発表のものに限る。ただし、口頭発表したもので、その旨を記してある場合はこの限りではない。授業記、講義ノート、随想などで学術的な意味を持たないものは掲載しない。
4. (投稿資格) 投稿資格は、次の各号に掲げるとおりとする。
  - (1) 長崎大学言語教育研究センターの専任教員
  - (2) 本学の戦略職員及び Key Program の英語担当教員で、編集委員会が認めたもの
  - (3) 長崎大学言語教育研究センターの専任教員の推薦があり、編集委員会が認めたもの。なお、その場合はタイトルと日本語で 400 字以内、又は英語で 200 words 以内のアブストラクトを 7 月 31 日までに提出するものとする。
5. (研究論文審査) 研究論文(査読付き)は、編集委員長が指名する計 5 名程度の査読委員(編集委員を含む)により審査される。専門性の観点から、編集委員会及び学内委員での査読が困難な場合は、学外の専門家に審査を依頼することがある。なお、研究論文で査読に合格しなかったものについては、編集委員会の判断と投稿者の希望に応じて研究ノートとして掲載することがある。また授業実践報告に関しては、応募されたものを査読委員会でチェックを行い、授業実践報告としてふさわしいと判断されたものを掲載する。
6. (査読方法) 査読委員会委員および査読委員会が委嘱する学内外の複数の論文審査委員によって匿名式で査読を行い、査読委員会が査読結果に基づいて掲載の可否を決定する。なお、掲載順序に関しては、編集委員会で決定する、
7. (投稿数) 研究論文(査読付き)に関しては、単著は 1 編までとする。なお、共著に関してはその限りではない。同様に、研究ノートおよび授業実践報告も単著は 1 編までとする。共著の場合は、この限りではない。
8. (掲載費用) 抜き刷りを希望する場合は、著者が実費を払うこととする。また長崎大学言語教育研究センターの専任教員以外の投稿者に対しては、掲載費用を徴収する場合がある。

- 付則 この内規は、2012年4月1日より施行する。
- 付則 この内規は、2015年7月10日より施行する。
- 付則 この内規は、2018年8月1日より施行する。
- 付則 この内規は、2022年6月30日より施行する。

## 長崎大学言語教育研究センター論集執筆規定（新）

1. 原原稿の使用言語は、原則日本語および英語とする。
2. 原稿は、A4 サイズの横書きとして、編集委員会作成のテンプレートを参考に作成する。
3. 和文の場合は、テンプレートに従い 38 字×38~39 行にて作成し、英文の場合もそれに準じる。
4. 原稿書式として、マージンは上下 25 mm 左右 20mm とする。本文使用フォントは、日本語は MS 明朝、英語・数字は Times New Roman とし、章、節の見出しは、ゴシック体とする。フォントサイズのポイントは、テンプレートに従い、タイトルを 14 ポイント、本文の日本語は 12 ポイント、英語も 12 ポイントで作成する。
5. 研究論文（査読付き）、研究のノートは、特に次の規定に従うものとする。
  - (1) 注・参考文献・図表を含めて 20 ページ以内とする。
  - (2) 註は本論の末尾に一括して付し、脚注は用いない。
  - (3) 日英両語のタイトルを付すこととする。
  - (4) 英語のアブストラクトを 200 words 以内で付けるものとする。アブストラクトは、ワン・パラグラフにまとめる。
  - (5) アブストラクトの下には、内容に関するキーワードを 5 つ程度提示することとする。
6. 授業実践報告は、特に次の規定に従うものとする。
  - (1) 注・参考文献・図表を含めて 6 ページ以内とする。
  - (2) アブストラクトはつけない。
7. 研究論文（査読付き）、研究ノートおよび授業実践報告の投稿者は、10 月 31 日までに、編集委員長まで原稿を電子データにて提出する。研究論文（査読付き）、研究ノートの審査結果は、「掲載可」「修正条件付」「掲載不可」のいずれかとして投稿者に通知される。修正条件付論文は、修正後再び査読委員会により再審査され、審査の結果、編集委員会より掲載が認められた場合は、研究論文として掲載される。授業実践報告に関しても同様のチェックが行われ、掲載の可否を決定し、通知する。
8. 言語教育研究センター事業報告は、発行年度の 1 月 20 日までに、原稿の電子データを編集委員長まで提出する。
9. 校正は投稿者の責任にて行なう。その際、内容や表記に関して、編集委員会からの指示があれば、それに従うこととする。また、校正は原則として、印刷上のミスに限るものとする。

付則 本要領は、2012年4月1日より施行する。

付則 本要領は、2015年7月10日より施行する。

付則 本要領は、2018年8月1日より施行する。

## Instructions for Contributors

1. Journal of Center for Language Studies, Nagasaki University, is published once a year.
2. Journal of Center for Language Studies, Nagasaki University invites submissions in the following three categories: Articles (Academic Papers), Research Notes and Teaching Reports.
- 3.1. We welcome submissions from Nagasaki University faculty and researchers (affiliated with CLS, or with CLS faculty members' recommendations and approval) on topics related to language and how language is related to culture and cognition. Teachers outside the university are required to write a 200 word abstract (submission deadline: July 31).

### Paper submission requirements:

- 1) Name and contact information
  - 2) Abstract with 4-6 key words (for Article submission)
  - 3) Manuscript length: no longer than 20 pages for articles and research notes, no longer than 6 pages for teaching reports. Detailed information including figures, tables, and data must be included within the aforementioned page limit.
  - 4) Formatting a paper: use a specific template for submission.
  - 5) Paper submission: submit a proofread paper in MS Word files and send the file as an e-mail attachment.
  - 6) Submission deadline: October 31.
4. Manuscripts must be written in either English or Japanese.
  5. Only work that will remain unpublished at the time of paper submission may be accepted. Papers concurrently submitted to other journals will not be considered. An individual may submit one article at a time.
  6. The editorial board consists of 5 (or more) faculty members appointed by the chair of editorial board. The editorial board members and unanimous reviewers evaluate submitted manuscripts.

Approved and Established: June 30, 2022

# **Developing a Prediction Equation for the G-TELP Scores from the TOEIC Scores Using Linear Regression Model: A Comparison of Four Data from 2014 to 2015 (Times 14)**

(Space)

Shinji OGASAWARA (Times 12)

Nagasaki University (Times 12)

(Space)

**Abstract** (Times 12, Within 200 words)

The purpose of this study is to investigate the possibility of predicting the scores of G-TELP Level 3 from the scores of TOEIC tests, by using four different data collected in July 2014, January 2015, July 2015 and January 2016. To obtain estimated scores of G-TELP in this study, linear simple regression analyses were used. The G-TELP scores were regarded as a dependent variable, while the TOEIC scores were....

(Space)

**Keywords:** G-TELP, TOEIC, linear regression analysis, coefficient of determination ( Times 12 Within 5 words) (Space)

**Introduction** (Times 12)

The purpose of this study is to examine how time lag of the two tests influences the overall prediction of the G-TELP scores from the TOEIC scores. To pursue the aim, we use four data collected from all first-year students of a national university from 2014 for the first semester to 2015 for the second semester.

(Space)

**Background of the Study** (Times 12)

Before reporting the results of our study, we will give an overview of prior studies in which TOEIC (or TOEFL) scores are predicted and estimated from the similar reliable English proficiency test or vice versa.

(Space)

**Method** (Times 12)

***Purpose of the study***

The purpose of this study is to continue to predict G-TELP scores from TOEIC scores, seeking a higher coefficient of determination in the analyses of regression. This study particularly focuses on how much the implementation time gap between the two tests influences the coefficient of determination. So in this study, the scores of G-TELP collected from the different months will be used to ascertain the influence.

(Space)

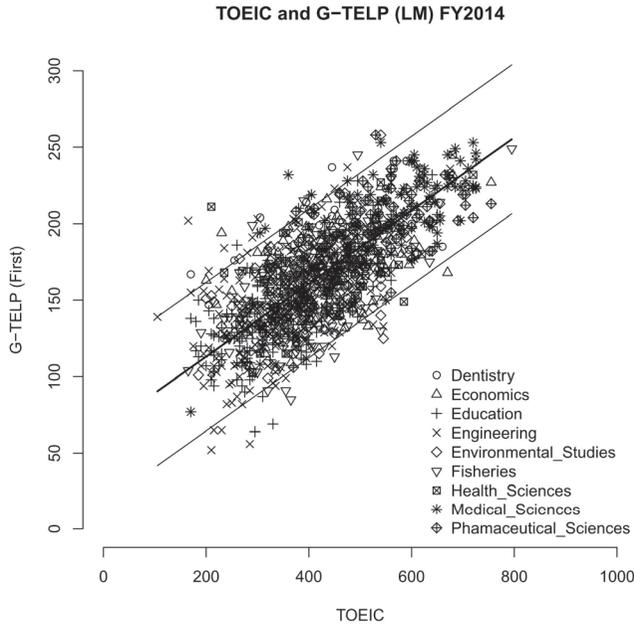
**Participants**

Participants were first-year students in a national university who took both G-TELP and TOEIC in the same academic year. **Procedure**

(Space)

**Results (Times 12)**

Figures 1 to 4 show the scatterplots of the G-TELP and TOEIC-IP scores....



**Figure 1** 2014 Simultaneous Data (G-TELP Level 3 Form 310)

(Space)

Table 4. Results of the regression analysis for the 2014 Simultaneous Data

Residuals	Min	1Q	Median	3Q	Max
	-79.042	-16.242	-0.346	17.556	100.672
	Estimate	Std. Error	t value	Pr(>  t/  )	
Intercept	65.410153	2.635225	24.82	<2e-16	
TOEIC	0.238661	0.006109	39.06	<2e-16	
Residual standard error	24.71				
Degree of freedom	1,174				
Multiple R <sup>2</sup>	0.5652				
Adjusted R <sup>2</sup>	0.5648				
F-statistics	1,526				
p-value	<2.2e-16				

G-TELP scores =65.410 + 0.238×TOEIC scores ( $R^2 = .56$ ) . . . . . (1)

G-TELP scores =76.378 + 0.209×TOEIC scores ( $R^2 = .49$ ) . . . . . (2)

G-TELP scores =65.745 + 0.233×TOEIC scores ( $R^2 = .51$ ) . . . . . (3)

G-TELP scores =72.105 + 0.212×TOEIC scores ( $R^2 = .46$ ) . . . . . (4)  
(Space)

**Discussion** (Times 12)

We found a fairly high coefficient of determination in the 2014 Simultaneous Data ( $R^2=.56$ ) and offered a reliable equation to predict...

(Space)

**Conclusion** (Times 12)

Finally, we would like to suggest the alternative analyses.

(Space)

**Notes** (Times 12)

1. This word ....

(Space)

**Acknowledgment (if necessary)**

This study was partially supported by Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (Grant Number 25370633). We would like to express our deep gratitude to ...

(Space)

**References**

Doi, M., & Zhang, Z. (2014). A descriptive and longitudinal analyses of TOEIC IP and TOEFL ITP scores at Chiba University. *Papers on Languages and Cultures* 8. 15-32. Chiba University Center for Language Education.

Eguchi, H. (2011). An examination of correlations between TOEFL and TOEIC scores among Hokusei Gakuen students: An attempt to find a score conversion formula. *Hokusei Review, the School of Humanities* 48(2), 35-44.

Gelman, A., Carlin, J. B., Stern, H. S., & Rubin, D. B. (2014). *Bayesian data analysis* 2. Boca Raton, FL: CRC Press.

Ogasawara, S., Maruyama, M. & Utsunomiya, M. (2015) Regression model predicting the scores of TOEIC from the G-TELP: Suggestions and implications obtained from the data for the two years. *Annual Review of English Learning and Teaching*, 20, 63-82.

- Yoshida, H. (2012). Can TOEIC Bridge test scores predict TOEIC test scores?: An investigation of the relationship between TOEIC Bridge and TOEIC tests. *The Japan Language Testing Association Journal* 15, 101-114.
- Zhang, S. (2006). Investigating the relative effects of persons, items, sections, and languages on TOEIC score dependability. *Language Testing*, 23(3), 351-369.

---

『長崎大学言語教育研究センター論集』第12号

---

発行日 2024年3月1日

編集 大橋絵理（編集委員長）  
小笠原真司（編集委員） 廣江顕（編集委員）

発行 長崎大学 言語教育研究センター

〒852-8521 長崎市文教町1番14号  
TEL : 095-819-2077 FAX : 095-819-2259

---

**JOURNAL OF  
CENTER FOR LANGUAGE STUDIES  
NAGASAKI UNIVERSITY**

**No. 12**

**CONTENTS**

**ARTICLES**

Analyzing Marked Characteristics in Reaction Object Constructions:  
A Corpus-Based Study of English

Toshiaki NISHIHARA, Risa NISHIHARA ..... 1

**CENTER FOR LANGUAGE STUDIES  
NAGASAKI UNIVERSITY**

**MARCH, 2024**